マイケルは“キング・オブ・ロックンロール”エルヴィス・プレスリーのひとり娘、リサ・マリー・プレスリーと結婚していた時期がある。
写真＝Getty Images

Part 2

KINGは何を引き受けたのか

『スリラー』に続く『BAD』の大ヒットで、
マイケルは“KING OF POP”と称されるようになる。
彼は音楽を通して、世界に何を伝えたかったのだろうか。

スーパースターの孤独

対談

湯川れい子（音楽評論家、作詞家）×**西寺郷太**（ミュージシャン、洋楽解説者）

**ジャクソン5時代からマイケルを十数回インタビューし、
『スリラー』などのライナーノーツも手がけた湯川れい子氏。
“マイケル研究の後継者”たる西寺郷太氏と共に、
「キング・オブ・ポップ」を形成した重要なファクターを掘り下げる。**

14歳のマイケル

西寺　湯川さんとは普段から仲良くさせていただいていて、マイケルについても何度も語り合っているのですが、今日は映画『Michael／マイケル』の公開記念ということで、いくつかのファクターに絞って、改めて彼の人生を振り返ってみたいと思います。まず、湯川さんがマイケルの存在を知ったのはいつ頃ですか？

湯川　ジャクソン5が出てきた頃ですね。当時、彼らは来日公演も行っていて、そのときにインタビューもさせていただきました。1973年のことです。

西寺　ちょうど僕が生まれた年ですね。当時のマイケルは14歳だったはずです。

湯川　そうですね。目がクリクリしていて、利発で可愛らしい男の子でしたよ。ただ、お父さんがとても厳格な方でね。私とマイケルが話していると、横で壁に寄りかかって監視しているんです。マイケルは時々、お父さんのほうをチラチラと見ながら話をしていました。まずいことを言うと、後で叱られるんでしょうね。

西寺　その辺りの恐怖は映画にも描かれていましたね。僕がマイケルを知ったのは1983年、

この続きは本誌でどうぞ！

取材・文＝尾谷幸憲　撮影＝タイコウクニヨシ